2020 年 1 月幹事会　企画幹事資料

議題 4.　2019 年度 第 42 年会報告（反省点）

＜年会前の準備＞

- 要旨集
  - ✓ 要旨集の製本はオリンピア印刷に委託し、11.5 万円と低価格で高品質な製本を提供頂いた。今回から背表紙を付けたことで本棚に立てても見やすくなった。来年度の要旨は、PDF を HP に掲載することを要検討。
- ショーケース及び講演
  - ✓ 講演者の発表資料が PPT における 16:4 か 4:3 で作成されており、プロジェクタで映写時に資料のサイズに応じて映写の設定が必要になった。

    ＜対応策＞

    発表資料の作成を講演者に依頼する時にスライドのサイズを指定した方が良い。
  - ✓ 各演者の資料を事務局 PC に別ファイルとして保存していたため、演者ごとにファイルを開く時間が必要となった。

    ＜対応策＞

    一つのファイルに全ての演者の資料を入れておいて、演者ごとの切り替え時間を短縮すると良い。
  - ✓ ショーケースで発表時間を超過する演者がおられたため、20 分延長し、意見交換会の開始を 10 分遅らせ、意見交換の時間を 10 分短縮しなければならなかった。

    ＜対応策＞

    ショーケースでもベルを鳴らして、時間を厳守してもらうようにする。
  - ✓ スライド映写機の型が古く、入力切り替えやフォーカスが自動でない。来年は最新型の設置を要望した方が良い。
- 展示企業によるブース紹介
  - ✓ 連絡シートに記載した企業の発表順と司会メモの発表順が異なっており、ファシリテーターの久米さんが企業を紹介された時、待機していた企業の順番を入れ替えなければならなかった。

    ＜対応策＞

    司会担当を含めた幹事用の連絡シートを準備しておき、ファシリテーターと司会進行で連携を取れるようにする。
  - ✓ 各演者がブース紹介を持ち込み PC で行ったため、演者ごとに PC のセッティングが必要となった。

    ＜対応策＞

    ショーケースと同様に事前に資料を送付頂いて、事務局 PC に一つのファイルとして保存しておくことで演者ごとの切り替え時間を短縮すると良い。
  - ✓ 年会・意見交換会に参加されないブース展示者から名札がないのか確認された。

    ＜対応策＞

ブース紹介プレゼンをされる方もいるため、事前に展示ブースのみの参加者を確認しておき名札を用意しておく。

- 参加申込
  - ✓ 参加者の個人情報を収集するため、申込時に個人情報を収集することの許諾を得る必要がある。

    ＜対応策＞

    他学会の対応を参考に、談話会ホームページに個人情報の使用に関するポリシーを掲載するなどの対応をする。
  - ✓ 2 日目のみの参加者に対して、1 日目のホテルチェックインは年会受付でなくフロントでになることを連絡するのを忘れた。

    ＜対応策＞

    庶務幹事が忘れずに開催前日までにメールで連絡する。

- 学会案内およびチラシ配布
  - ✓ 開催直前に依頼を受け、直前にメール審議を連発した。

    ＜対応策＞

    会員に対して庶務幹事から余裕をもって希望を確認する。また、幹事会による審議でなく担当常任幹事が案内・配布の可否を判断できるようにルールを策定する（杉山会長からの要望）。

- 参加者からの問い合わせ
  - ✓ 功労会員から年会参加者情報の提供を求められ、個人情報であることを理由に断った。

    ＜対応策＞

    上述の個人情報ポリシーを HP に掲載することで、お断りする際に説明がしやすくなると思われる。

＜年会当日＞

- 受付までの準備
  - ✓ 1 名の参加者の名札に朝食券を入れ忘れてしまった。

    ＜対応策＞

    注意深く確認する。

- 受付
  - ✓ 受付時に全演者の講演スライドを試写できなかった。

    ＜対応策＞

    ショーケース及び展示企業によるブース紹介の資料を事務局に入れておいて、事前に試写しておくと共に、1 日目及び 2 日目の 2 回に分けて試写すると全演者の対応ができると思います。

- 講演及び全体について
  - ✓ 今年だけではないが、質問者に偏りがある。また、若い一般会員からの質問がほとんどない。
    ＜対応策＞
    動態談話会の風土だと感じるので、企業の参加者や若手の参加者にも質問頂けるような工夫が必要。談話会幹事が、素人的なサクラ質問をして、気軽に質問できる雰囲気作りをしてはどうか。
  - ✓ 食事の時間の学会案内は、時間短縮の観点や、食事会場の盛り上げのためにも良かった。来年も継続する。
  - ✓ スライドが若干見にくかったので、気持ち照明を落としてもらう。
  - ✓ 特別講演にて、照明が明るくポインタが見えにくい時があった。
    ＜対応策＞
    照明の明暗を確認時にポインタの見やすさも同時に確認する必要がある。
  - ✓ 6 名（18000 円分）ほど昼食をとられない方がいた。
    ＜対応策＞
    参加申し込み時に昼食が必要か確認している。1 日目の受付時に確認することも考えられるが、受付作業が煩雑になること、当日体調や予定が変わる方もいるため、ある程度余るのは仕方ないか。

- 意見交換会（会場：3 階チェルシー）
  - ✓ 会の途中での挨拶を聞かれていない先生方が多くおられた。
    ＜対応策＞
    挨拶の時間を分散させず、固めることでその時だけでもおしゃべりを止めて注目してもらうようにする。
  - ✓ 屋台がお寿司だけだったのは少し寂しかった。
    ＜対応策＞
    来年度は反対側にもう 1 台屋台を設置する。静岡おでんが食べたかったという意見を数名から聞いた。
  - ✓ 料理の量は余りがでるくらいだったので例年通りで良い。料理の質もこれくらいがちょうどよい。

- 二次会（会場：30 階パール（定員 64 名））
  - ✓ カラオケ企画は盛大であったが、二次会会場の空席があり、参加者は少なかった。
    ＜対応策＞
    参加者を増やす施策を継続して考察する。来年は口コミで参加者が増えることを期待したい。
  - ✓ 採点形式のカラオケ大会であったが、前半の 2 人は採点モードになっていなく点数が付かなった。
    ＜対応策＞
    事前に採点モードをしっかり確認すること。

- ✓ カラオケは個人というより、グループ対抗のようになったので、来年もするならグループ対抗で実施しても良いかも。
- ✓ 食べ物は乾きもののつまみ程度だったがこれで十分。フルーツ盛りは来年も要らない。

- 展示ブース
  - ✓ 展示企業が 6 社と多くの出展があったが、参加者の方で展示ブースを見ている方が少なかった。
    ＜対応策＞
    より演題と関連のある展示企業を選抜する。
  - ✓ 年会に参加されない方が講演中に待機する場所がなく、途中で椅子を用意した。
    ＜対応策＞
    初めから各展示ブース用に椅子を用意しておく。

議題 5.　2020 年度 第 43 年会の準備状況

- 日程：

開催日：2020 年 11 月 19 日（木）～20 日（金）
場所：オークラアクトシティホテル浜松（浜松）

- 事務局・担当常任幹事：

澤田企画幹事（大日本製薬株式会社）
久米常任幹事（田辺三菱製薬）

2020 年度（第 43 年会）のコンセプト（メインテーマ）、シンポジウムテーマ、組織委員会メンバー案を検討すべく、企画担当常任幹事、企画幹事及び杉山会長での打合せをメールベースで行った。

- 検討内容：

1. 過去 5 年のプログラム

	夏セミナー			年会	
	セッション1	セッション２	セッション3	シンポジウム1	シンポジウム2
2015年	イメエージング技術を駆使した創薬研究の実践	M&Sは創薬のブースターになるか？	薬剤肝障害を回避するために企業研究者ができること	バイオマーカーによる創薬	モデル動物の進化
2016年	創薬における薬物相互作用との上手な付き合い方	バイオマーカー研究の実施と測定法バリデーション	新規医薬品の初期製剤開発とその評価	DDS技術が切り拓く新規モダリティの未来	毒性バイオマーカーの探索と個別化医療への道のり
2017年	PK/PD-QSPモデルを活用した医薬品の探索・開発の考え方	個別化医療における薬物動態研究の役割	抗体医薬品開発における薬物動態研究の貢献	次世代の創薬研究を担う新規ツール（肝細胞システム，AI技術）	Rapid Manufacturingから最終製剤決定に至る消化管吸収性予測
2018年	ヒト初回投与量の設定	DDIガイダンス	非経口製剤（経皮、経鼻、点眼など）のDDS技術と薬物動態評価）	AI, in silico技術を活用した薬物動態および毒性の予測	核酸医薬品開発を促進する薬物動態研究
2019年	薬物相互作用評価における内因性バイオマーカー研究の最前線	実践で役に立つヒト薬物動態予測法の基礎と最前線	創薬におけるヒト代謝物の評価：現状と課題	低分子創薬の可能性を拡げる新規創薬ターゲット	低分子創薬の動態最適化及びDDS戦略
2020年	トランスポーター	ニューモダリティ（細胞医療）	バイオアナリシス		
	DDI	開発・個別化医療	ツール・評価法	製剤	バイオマーカー
	ヒト予測・種差	モダリティー	DDS	M&S	安全性

以下の点を考慮して、シンポジウム案を作成した。

・　年会ではツール、評価法、DDS 等の技術ベースの演題が多い傾向にある。
　→重複感はありますが、やはり関心の高いトピックであるので、取り上げたい。
・　細胞医薬は関心が高まっているが、夏セミナーと重複することもあり避ける

・　会員企業で分析関連の CRO が多いことから、分析関連の演題は含めることを考慮する。
・　後期臨床（臨床開発、臨床 DDI、レギュラトリー等）のトピックがここ数年では年会で取り上げられていないのでシンポジウムテーマの一つとして提案する。

2. 第 43 年会　概要案

メインテーマ：障壁に挑む薬物動態研究（仮）

障壁は吸収・分布等の生理学的なバリア機能、科学技術の限界、レギュラトリーなど複数の意味を込めた。“挑む”は薬物動態研究者が主体的にチャレンジしようというメッセージになることを期待している。

シンポジウム案（詳細は後述、シンポジウムタイトルは仮）

1. 深化する薬物動態制御技術（仮）
2. 新技術で切り拓く創薬研究の近未来（仮）
3. 薬物動態研究が推進する臨床開発（仮）

（シンポジウムタイトルは演題決定時に再検討する）

3. シンポジウム案詳細

シンポジウム案 1. 深化する薬物動態制御技術

様々なモダリティーでの創薬研究が盛んに行われているが、経口吸収性、生体内安定性、薬効ターゲットへの分布等、薬物動態を制御することがその開発に不可欠である。このような創薬研究の構造変化に伴い、薬物動態制御のソリューションを提案することで薬物動態研究者が創薬研究を強力に推進することが可能となる。このシンポジウムでは近年発展が目覚ましい薬物動態制御技術（関門組織通過、ターゲティング技術等）にフォーカスし、その最新動向を紹介するとともに、薬物動態研究者間でその技術活用について議論する。

組織員候補

大槻　純男先生：熊本大
楠原　洋之先生：東京大
平林　英樹先生：武田薬品工業
常任幹事を１名加える

想定演題（例）

・　高分子の脳デリバリーに資する脳関門透過ペプチドの開発：熊本大・大槻先生
・　ペプチドを用いた細胞内デリバリー：京都大学化学研究所・二木史朗先生
・　上皮バリアの生物学を基盤とした DDS 研究：大阪大学・近藤昌夫先生
・　糖タンパク質を標的とした革新的がん特異的抗体の開発：東北大学・加藤幸成先生
・　臓器・腫瘍ターゲティング
・　吸収改善

シンポジウム案 2. 新技術で切り拓く創薬研究の近未来

既存業務の成熟化・コモディティ化が進むとともに、医薬品開発のマルチモダリティ一化への対応を迫られるなど薬物動態研究の役割が変化している。このような状況に柔軟に対応するためには既存技術のブラッシュアップのみでは限界があり、薬物動態研究者には継続的な新規評価技術開発・利活用が求められている。このシンポジウムでは、医薬品開発の成功確率向上のために期待される最新評価技術の現状を共有し、薬物動態研究者視点で、その有用性について議論したい。

組織員候補

水口　裕之先生：大阪大学・医薬基盤研

小森　高文先生：エーザイ

渡邉　伸明先生：第一三共

常任幹事を１名加える

想定演題（例）

- MPS：Microphysiological system（生体模倣システム）の創薬応用と規格化に向けた国内の取り組み：国立医薬品食品衛生研究所・石田　誠一先生
- ヒト iPS 細胞由来肝・小腸細胞の創薬応用：大阪大・水口先生
- ヒト iPS 由来小腸細胞を用いた最新の bottom-up PBPK 法：塩野義製薬・眞弓　慶先生
- LC/MS によるニューモダリティ定量の現状と課題：第一三共・合田竜弥先生
- 針状ダイヤモンド微小電極を駆使した生体内薬物センシングシステムの創出：新潟大・緒方元気先生
- 「ケンタウロスケミスト」による低分子創薬の加速：Excentia 田中大輔先生（AI 創薬）
- MPS、3D 培養、MSI、センシング技術、AI 技術等

シンポジウム案 3. 薬物動態研究が推進する臨床開発

医薬品開発の効率化、成功確度向上に対する薬物動態研究の貢献が必要不可欠である、このシンポジウムでは臨床開発段階で薬物動態研究が貢献する領域として、MIST（代謝物安全性評価）対応としてのヒト代謝物評価戦略、薬物相互作用評価としての内因性バイオマーカーにフォーカスし、ノウハウを共有するとともに、今後の活用方法について議論したい。

組織員候補

吉門　崇先生：横浜薬科大学

丹羽　真先生：日本新薬

常任幹事を１名加える

想定演題（例）

- 臨床ステージにおけるヒト試料中の代謝物検索および曝露量の評価：田辺三菱製薬・後藤 貴博先生
- 標品を用いずヒト代謝物評価を行うための段階的アプローチ：JT・小林 暁
- 内因性バイオマーカーを用いたトランスポーター介在性薬物相互作用の定量的評価：東京大学 楠原 洋之先生

- CYP3A 活性のバイオマーカーの分析法設定とバリデーション：塩野義製薬・竹田 友理先生
- PBPK、ファーマコメトリクスまで拡張するか

● 本日の討議内容：

1. 3 つのシンポジウム案の審議と絞り込み
   - ✓ ひとつのシンポジウムで 4-5 演題（ふたつのシンポで 8-10 演題が限度）
   - ✓ ミニシンポ（2 演題程度）を加えることは可能.
   - ✓ 企画幹事案：案 1、案 2 を採用とし、案 3 は不採用かテーマを絞り込んでミニシンポとするのはどうか。
2. 組織委員候補者の推薦、選定

議題 6.　2020 年度 例会の準備状況

1）2020 年 4 月例会

開催日：2020 年 4 月 17 日（金）、13:00～16:30

場　所：千里ライフサイエンスセンター（大阪）

講　演		演題・所属・氏名	備　考
一般講演	1）	13:00～13:45 「キメラマウスから採取した新鮮ヒト肝細胞（PXB-cells）の創薬への利用」（仮題） 株式会社フェニックスバイオ 立野（向谷）　知世　先生	済 演題 済 演者 済 ご略歴
	2）	13:45～14:30 「創薬支援インフォマティクスシステム構築の事業化に向けて」」（仮題） 株式会社富士通九州システムズ 古賀　裕美　先生	済 演題 済 演者 済 ご略歴
特別講演	1）	14:45～15:30 「Phase-0/Microdosing 国際展開の基盤構築」 Tal Burt 先生	済 演題 済 演者 未 ご略歴
	2）	15:30～16:15 「Phase-0/Microdosing 手法の GSK での実践例」 Graeme Young 先生	済 演題 済 演者 未 ご略歴
司　会		大日本住友製薬株式会社	

2）2020 年 9 月例会

開催日：2019 年 9 月 14 日（月）　13:30～16:30

場所：日本薬学会長井記念ホール（東京）

一般講演：
会員名簿は富士薬品、マルホの順。1/30 に講演依頼済み。

特別講演：
演者未定。一般講演の内容と関連した先生を選定する。2～3 月に候補の先生を検討し、4 月幹事会で決定後に打診予定。

以　上